

## 「公現」の讚美歌

街では一二月に入るともうクリスマスツリーを見かけます。飾るのも早いかわりに片付けるのも早く、一二月二五日を過ぎるとたちまち門松に取り替えられていることもありません。変わり身の早さに嘆かわしくもありませんが、さて教会ではどうでしょう、クリスマスは、いつごろまでに片付けられているでしょうか。

欧米では一二月二五日から一月六日までをクリスマスの時として過ごす伝統があり、克蘭ツやツリーもその間飾っておくのが本来だったようです。当然、元旦もその期間に入ります。御子の到来によって新しい時が始まった喜びの中で新年をも迎えるのです。クリスマスから十二の夜が過ぎると一月六日の「公現日」を迎えます。もともと降誕はこの日に祝われていました。古くからの冬至の祭の日を、教会は神の御子がこの世に現れたことを祝う日とし、「現れる」という意味のギリシア語から「エピファニー」とよばれる祭が行われるようになったのです。「エ

ピファニー」つまり御子の「現れ」としては、降誕だけでなく、ヨルダン川での受洗や、最初の奇跡である「カナの婚礼」、また東方の博士たちへのしるしである星の出現のできごとがとりあげられて祝われました。やがて降誕の祝いの日付は一二月二五日にとつてかわりましたが、一月六日のエピファニーも「御子が現れた」祝いの日として残ったのです。とりわけ、最後に挙げた「東方の博士の来訪」が一月六日の祝いの内容として意識されるようになり、これはまた「異邦人への救いの現れ」とも解釈されるようになっていきました。（詳しい経緯については参考文献、とくにクルマンのものを参照してください。）

さて、この一月六日の「エピファニー」公現日」を祝うことは、日本のプロテスタント教会ではほとんど行われていないようです。ひとつには、この日が日曜日とは限らないことも理由でしょう。しかし、クリスマスのように、その前後の日曜日に「公現」を意識した礼拝を行うことは可能ではないでしょうか。

いっぽう、日本の教会では一月一日に「元旦礼拝」を行うことが珍しくありません。これをただ単に初詣の代わり、あるいは対抗とするのではなく、むしろ、御子の現われと新

しい時の到来を祝う「公現」の意味をも含めた礼拝として考えたほうが、よりふさわしいかもしれません。

ことさら「公現日の礼拝」などと銘打たなくとも、クリスマスの後の何回かの日曜日の礼拝を、キリストの到来と「現れ」を主題として組み立てていくことも可能です。古く「公現」の内容として祝われていた「東方の博士たちの来訪」「キリストの受洗」「カナの婚礼」を順にとりあげていつてもいいでしょうし、あるいはもっと広く「世を照らす光の到来」「世界全体への神の救いの啓示」などを主題とすることもできるでしょう。

このようにして、「御子の到来」を一二月二五日の前後だけでなく、しばらくの時をかけてゆっくりとかみしめ、味わい、喜び、感謝することを考えてみましょう。クリスマスを、なにもあわてて「片付け」てしまうことはいのです。

では、このような礼拝を構成するとき、どんな讚美歌を選んだらよいでしょう。「公現」の意味に触れる讚美歌をいくつか挙げてみたいと思います。

まず、当然、御子の降誕を讃えるクリスマス

たとえば「きよしこの夜」などのように、誕生の場面の情景や「夜」の時とあまりに強く結びついたイメージの歌は、一月になって午前中の礼拝に歌うには違和感が大きいでしょう。けれども、次に挙げるようなものは、案外用いることができるのではないのでしょうか。

### ・二六八 『朝日は昇りて』

日本の教会が生んだすぐれた讃美歌のひとつです。「朝日は昇りて世を照らせり」と、御子の降誕を太陽の光になぞらえて歌い出し、公現に重なる内容を格調高く歌います。朝の礼拝にもふさわしく、元旦礼拝などで用いても違和感がありません。五四年版では一部省略されていた歌詞が『21』では復活しました。

### ・二五九 『いそぎ来たれ、主にある民』

有名なクリスマスの讃美歌ですが、『21』では従来の「神の御子は今宵しも」という歌い出しが改められ、朝の礼拝でも歌えるものとなりました。「来たりて拝め」というくりかえしは「東方の博士たち」が御子を拝んだできごとをも連想させます。

### ・二六〇 『いざ歌え、いざ祝え』

これもクリスマスの定番の讃美歌ですが、やはり『21』になって「夜」を意味する語が除かれました。「いざ祝え、このめぐみの時、

救い主あらわれぬ」という歌詞は、たとえば元旦礼拝などでも使えそうです。

### ・二七一 『喜びはむねに』

クリスマスの情景よりもむしろ、その意味するところをしみじみと歌う、「公現」にふさわしい讃美歌です。「フィンランディア」で知られたシベリウスの手になるメロデーはとても親しみやすく、すぐに覚えられます。

伝統的に「エピファニー」として祝われてきた「東方の博士たちの来訪」を歌う讃美歌は、日本ではむしろクリスマスの讃美歌として親しまれてきました。『こどもさんびか』の二一「とおくのひがしから」、二二「おほしがひかる」などに、教会学校の降誕劇などを懐かしく思い出す人は少なくないでしょう。これらは『こどもさんびか改訂版』にもそのまま採用されて残っていますから、これからも多くのこどもたちに親しまれていくことでしょう。

『讃美歌21』に収録された、「博士たちの来訪」を内容とする讃美歌のひとつに二七九があります。

### ・二七九 『ふるさとを離れて遠く』

プエルトリコの伝統的なキャロルだそうです。が、「ふるさとを離れて遠く」という歌詞には、故郷アフリカからカリブの島々へ売ら

れてきた黒人奴隷の子孫としての歴史や、あるいは底辺の労働者として北米へ渡っていった数多くのプエルトリコ人の悲哀が重ねあわされているように思えてなりません。そう考えると「ゆくてには きらめく星が新しい夜明けを告げる」というくりかえしが「エピファニー」救い主の到来、現れ」の意味をさらに深める思いがします。

『讃美歌21』の「公現」の項目に挙げられた讃美歌からいくつかを挙げましょう。

### ・二七五 『闇を行くものは』

クリスマスによく読まれるイザヤ書九章にもとづいた讃美歌です。もちろんクリスマス

の讃美歌として用いてもよいのですが、

闇を行くものは光を見た。

死の陰行くもの 夜明けを見た。

ということばは、御子の到来を希望の光として見あげる「公現」の礼拝にこそふさわしいとも言えます。

### ・二七七 『罪なき神の子』

これはイエスの受洗を内容とする、珍しい讃美歌です。降誕からおよそ三十年後、イエスは人々の前に姿を現して活動を開始します。その、いわゆる「公生涯」の始まりを画す洗礼のできごと、古くから祝われてきました。この讃美歌は、ただイエスの洗礼の情

景を描くだけではありません。

荒れ野にいでゆき 主は闘いたもう。

宣教のみわざ 今こそはじまる。

洗礼によりて 主とひとつにされ

こころみおそれず われらもいでゆか  
ん。

と歌い、洗礼が主の宣教の働きの始まりであり、また、その主のわざにあずかるようにわたしたちも招かれていることが強調されています。「公現」の意味を現代にあつて改めて受けとめ直した内容といえるでしょう。

洗礼の後のイエスの生涯にかかわる讃美歌としては、次のようなものを挙げることでできます。

#### ・二八〇 『馬槽のなかに』

日本の教会で生まれて外国でも歌われるに至ったいくつかの讃美歌のなかで、その頂点にたつ作品ではないでしょうか。「馬槽のなかにうぶごえあげ」から「十字架のうえにあげられつつ」まで、イエスの生涯を簡潔に力強く歌う歌詞は、もちろんさまざまな機会に歌われてよいものです。しかし、この歌詞全体のキーワードは「この人を見よ」とのことばです。直接にはヨハネ一九章五節（文語訳）のピラトのことばによるものですが、とくに四節の、

この人を見よ この人こそ  
人となりたる 活ける神なれ

を味わえば、「この人を見よ」とのことばは、受肉して人の世に到来した御子なる神の「現れ」を、真剣に受け止めよとの促しと考えることができるでしょう。

#### ・四三八 『若き預言者』

牧師就任式などに歌われることもある讃美歌です。イエスを「若き預言者」「ひたすら人に仕えし主」ととらえ、またそのイエスが「真理の道にわれを招く」と受けとめていきます。これもやはり、人の世に「現れた」御子キリストへの応答を促している讃美歌です。

#### ・二九〇 『おどり出る姿で』

このいきいきとした讃美歌が日常的に礼拝で用いられるようになったとしたら、日本の教会も大きく変わってくるのではないでしょう。キリストが「おどり出る」という大胆なイメージは、「公現」の意味に新しい理解を与えるものです。

おどれ輪になって リードする主と共に

福音の喜びへと 招かれた者はみな。  
と、この歌もやはり現れてくださった主に招かれた者たちの応答をよびかけています。

ヨハネ福音書二章は、イエスが水をぶどう

酒に変えた、いわゆる「カナの婚礼」のできごとを記し、わざわざ「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された（ヨハネ二・一二）」とコメントしています。前述のように、これによって、この「カナの婚礼」を主の栄光の「現れ」すなわちエピファニーの内容として祝うことも教会の古いならわしでした。

#### ・二八六 『ほめたたえよ、われらの主を』

これまで「カナの婚礼」に触れる讃美歌としては、たとえば『讃美歌第二編』二二二がりましたが、これは「結婚式の祝福」を主題とした歌でした。しかし、この『ほめたたえよ、われらの主を』では、

主はカナの婚礼で栄光現す。

かめの水が主の言葉で

ぶどう酒にかわる その驚き。

と、主がみことばをもってその栄光を現されたことを主題としています。古来の「エピファニー」の伝統に明確に位置づけられる讃美歌となっています。

#### ・二九一 『み神の座を捨て』

これも「カナの婚礼」に触れて「婚礼の席で奇跡を起こされ（二節）」と歌っています。しかし二八六とは異なり「カナの婚礼」を全体の題材としているわけではありません。むしろ全体としては「み神の座を捨て、人とな

られた主（一節）」の生涯をたどり、とくに

背いたものをも大切にされて、

罪人たちさえ 深く愛される

病めるものたちを見捨てることなく

御言葉を与え、深くなぐさめる

と、弱く小さい者に注がれる主の愛を歌います。あの『馬槽のなかに』と通じるものを感じさせます。

「公現」を、より広くイエス・キリストの宣教のわざの発現とすれば、次のような讃美歌を用いての礼拝を考えることができます。

・五七 『ガリラヤの風かおる丘で』

比較的新しい讃美歌ですが教派を超えて親しまれています。イエスの生涯を「みことば」をキーワードとして簡潔にまとめています。

・五五 『人となりたる神のことば』

これも、みことばをテーマとする讃美歌ですが、とくにヨハネ一章九節に関連するものと考えて、「公現」に結びつけることができるでしょう。

・一六 『われらの主こそは』

礼拝の開会にあたって歌われることも多い讃美歌です。一節では「世界の王」としての主、また三節では「正義の光」が歌われます。御子が世界のすべての人々を照らす光と

して現れたことを祝う公現の礼拝の開会に用いるのにふさわしいかもしれません。

（久世そらち）

参考文献

クルマン『クリスマスの起源』教文館  
今橋朗『よくわかるキリスト教の暦』

キリスト新聞社

日本基督教団出版局聖書日課編集委員会  
『新しい教会暦と聖書日課』

日本基督教団出版局

『讃美歌21選曲ガイド』教団出版局

\* 『礼拝と音楽 119号』

二〇〇三年十一月 掲載